

## 私がエイズのボランティアを始めた理由（前半）

25年前ほど前にいた高校の保健委員会で、放課後ゼミのようなことをしようということになり、何について学びたいか保健委員にアンケートをとった。結果は「エイズ」がダントツで、各自調べるテーマを決めて、放課後に保健室に集まり、調べてきたことの発表と質疑応答のディスカッションをした。これを何回も継続するうちに、その当時起こっていた「**薬害エイズ**」や**差別・偏見による人権侵害**のことが浮き彫りになってきた。これは大変なことだとみんなが気がついた。

土曜日の午後、市川のショッピングモールで「エイズメモリアルキルト展」が開催されることを知り、行けるメンバーで見学に行った。ある保健委員の男の子が、一つのキルトを長い間じっと見つめているのに気づいた人が彼に声をかけた。「すごく真剣に見ているね。実は僕、感染者なんだ。もし学校で必要があれば呼んでくれたらいつでも行くよ。」と言って、彼に連絡先を渡してくれた。この人がアルファさん。それを聞いた私は、ぜひ来てもらおうよと連絡をとり、放課後に彼のバディとともに保健室に来てもらうこととなった。その日は関心のある保健委員と教員が保健室に集まり、お茶会をしながら彼のこれまでに起きたことを聴いた。

# HIV/AIDS



日本では毎年新たに1,500人くらいの人が感染している。他人事ではないんだよ。

アルファさんは、生まれつき怪我をすると血が止まらなくなる血友病だった。血友病は打撲などすると、止まらない血の行き場がないため、ものすごく患部が腫れ上がり激痛を伴う。それが1980年代始め頃に血液製剤という画期的な薬が開発されて、血友病患者さんはとても喜んだ。しかし、当時アメリカで作られていた製剤にHIVが混入していたんだ。製剤に使われた血液は、売血（献血ではなく、血を売ることで生活をしている人がいた）によるものも含まれていた。例えば100人の血液に1人でもHIVが入っていたら、それも混ぜて製剤は作られるため、HIV混入製剤となってしまう。開発当時は加熱処理されていなかったから、多くの血友病患者さんがこの薬でHIVに感染してしまった。アルファさんもそうして感染した一人。現在は血液製剤は全て加熱処理しているから大丈夫。特に日本では、売血というものは無く、全てが献血血液を使用して、輸血や血液製剤を作るのに使用している。

献血の際に、ものすごく詳細な問診票を記入するのも、献血血液を安全なものにするためにとっても大切なことなんだ。

だからこそ、献血は尊い。見えない誰かが苦しんでいることを想像でき、若い新鮮な血液を提供しようと思う南高の生徒は素晴らしいと思う。

アルファさんとのディスカッションではたくさんの質問がとびかった。そしてそこにいた私たちに勇気を与えた。感染者さんは「かわいそうな人」ではない。逆境をプラス思考で乗り越える生き様を見せられて、尊敬と感動で心が震えた。保健委員は「こんな素晴らしい話を自分たちだけ聴いたのではもったいないからみんなに聴かせたい」と語った。そしてその後全校集会が実現した。

あるコラムにこんな言葉が載っていた。

「命とは、人間が持っている時間のことです。人は自分のために時間を使います。さらに、誰かのために時間を使ってください。」 聖路加国際病院名誉院長 日野原重明氏（2017年105歳没）